

チェック!

# 防疫対策の継続で 豚赤痢菌を農場に持ち込まない



今回のテーマは  
豚赤痢と予防対策  
についてです。

今年の冬も例年どおりの寒さとなっております。

冬場は寒さを防ぐため畜舎をしめきりがちとなります。換気が十分にできず空気がこもってしまい、咳が多く見られる場合や、すきま風による腹冷えからくる下痢などが起こることもあり、管理に何かと気をつかう季節です。

今回は下痢対策、特に肥育豚での豚赤痢とその予防策についてご紹介します。

## ●豚赤痢とは

豚赤痢は豚赤痢菌 (*Brachyspira hyodysenteriae*) によって引き起こされる下痢です。症状は元気消失、食欲減退に始まり血液、粘液などを含む下痢便の排泄が観察されます。品種、性別に関係なく発生しますが、肥育豚での発生が多いです。

死亡率は低く、発育遅延や飼料効率の低下による出荷日数の延長、ピッグフローの停滞、豚舎の空舎期間が十分にとれなくなる等の問題が発生します。

また、農場で発生すると農場全体に広がる例が多く、常在化した場合、農場からの根絶は非常に難しいと言われている病気です。

対策は病豚の早期発見と隔離、有効薬剤の投与、消毒の徹底、長靴・衣服の交換などがあげられます。豚移動後の豚房、豚舎については消毒の徹底と十分な乾燥期間の確保が望ましいです。さらに次の豚の導入前に豚房に石灰を塗布することも有効です。

都道府県において豚赤痢と届けられた頭数は2000年には1,564頭ありましたが、10年には155頭、11年は195頭となり、届出頭数は10年前に比べて減少しています。

しかしながら、04年から「と畜場法」が改正され、豚赤痢は全部廃棄の対象疾病となりました。仮に、と畜場の食肉検査で豚赤痢と疑わしい事例が発見された場合、枝肉を一時保留し、豚赤痢菌がいるかどうかを検査します。この検査で豚赤痢と判定されれば枝肉を全廃棄

## 豚赤痢 届出件数

期間	戸数	頭数
2000年 1～12月	75	1,564
2010年 1～12月	77	155
2011年 1～12月	94	195

出典：動物衛生研究所ホームページ 家畜の監視伝染病 豚赤痢より

することとなることから、農場においては引き続き注意すべき病気としてあげられます。

## ●豚赤痢菌を農場に持ち込まない

豚赤痢を引き起こす豚赤痢菌は農場の外から持ち込まれることが想定されます。このため、農場外から農場へ持ち込むもの（豚、資材、人、トラックなど）の搬入については特に注意が必要です。豚であれば検疫舎での一定期間飼育後の導入、資材、トラックは消毒後の農場内への搬入、人であれば農場専用衣服・靴の着用などがあげられます。

また忘れていけないのはネズミ対策です。ネズミは病気の運び屋として知られていますが、豚赤痢菌についての米国の養豚場での調査では、捕獲されたネズミ257匹中4匹(1.6%)から分離が報告されています。

## 米国の養豚場で捕獲したネズミからの豚赤痢菌分離成績

調査匹数	陽性	陰性
257	4 (1.6%)	253 (98.4%)

注：調査対象農場：8農場(うち6農場で豚赤痢発生)  
出典：Jonesら J.Clin.Microbiol.1982を改編

このように豚赤痢対策は「病気を農場に持ち込まない」取り組みが中心となります。日常の管理の中で今一度これら取り組みが確実に実施できているか再確認をお願いします。また、冬場は外気温が低いいため豚を飼養している豚舎内にネズミが生息しやすくなります。日常からのネズミ駆除を心がけてください。